

ギアモデルの「学ぶ」に関する整理結果について

令和4年1月25日に開催した令和3年度第2回滋賀県環境学習等推進協議会において議論されたギアモデルの「学ぶ」について、以下のとおり議論とその後の計画本文の確認の結果を整理しました。

1. ギアモデルのステップの一つである「学ぶ」の意味について

ギアモデルのステップの一つである「学ぶ」については、令和3年度第2回環境学習等推進協議会での議論の結果を踏まえ、そのまま「学ぶ」という言葉を使うこととします。ただし、この言葉のギアモデルの中での意味を明確にするために、定義を示すのではなく、次のような例示案を示すこととします。

<例示案>

学ぶとは、自分で調べたり、体験したりすることにより、気づきをより深めることを言います。

2. 計画本文中における「学ぶ」と「学び」についての確認結果について

第四次滋賀県環境学習推進計画（以下「計画」という）本文全体における「学ぶ」と「学び」という表現について、これらの言葉を上記の例示案の意味を超えた広義の「学ぶ」の意味で使用されていないかを確認しました。

<整理結果>

計画本文中には、「学ぶ」は19か所、「学び」は32か所の記載がありました。

それらの一部については、下に示すように、広義の「学ぶ」の意味で「学ぶ」「学び」が使用されている（そのような誤解を生む可能性のある）箇所が、確認できた限りで26か所ありました。これらの該当箇所については「学習」（22か所）や「学ぶ・考える」（4か所）等の表現に差し替えたほうがよいと思われます。

(P3 該当箇所抜粋)

■「環境教育」と「環境学習」

環境を学ぶことに関して、「環境教育」と「環境学習」という言葉が使われていますが、両者は厳密に区分して使い分けられているものではなく、また各々の定義について統一的な見解が定まっているものでもありません。

⇒「環境を学ぶこと」に関しては、「学ぶこと」イコール「環境学習」（広義の「学ぶ」の意味で使われている）と読めることから、「環境を学び考えること」に修正する。

(P5 該当箇所抜粋)

(1) 原体験として自然に触れ、普段から自然と関わる

琵琶湖に代表される豊かな自然と、その自然を人々が守り育んできた歴史を有する滋賀は、環境について学ぶための生きた教材の宝庫です。

自然の中で遊んだことなどの原体験は、「いのち」の大切さを知ることや自然を大切にする気持ちを育むことにつながることから、四季を通して普段から自然と関わることが重要です。そのような経験の積み重ねが、自ら学ぶ探求心や環境の変化に気づく力を高めることにつながります。

⇒「環境を学ぶため」は「環境を学習するため」、「自ら学ぶ」は「自ら学び考える」に修正する。

(P24 該当箇所抜粋)

学ぶ

幼児期から高齢期までライフステージに応じた環境学習の推進により、体系的な学びの機会を提供します。

⇒「体系的な学びの機会」は「気づきを深めるための学びの機会」に修正する。

なお、すでに確定している計画書をいまから修正することはできないため、以上のような計画書の表現の修正は次に計画を改定する時点で行うことにします。